戦争を止め、社会を変える力がここにある

11・3全国労働者総決起集会＆改憲戦争阻止1万人大行進
～集会報告～

全日建運輸連帯労組関西地区生コン支部と全国金属機械労組港合同、国鉄千葉動力車労働組合、国鉄闘争全国運動、改憲・戦争阻止！大行進が呼びかけた11・３全国労働者総決起集会と改憲阻止１万人大行進が11月３日、東京・日比谷野外音楽堂で開かれた。集会自体の参加者としては昨年を上回る3000人が結集し、日米政府による中国侵略戦争を阻止し、階級的労働運動をよみがえらせる闘いの火柱を上げた。

先の総選挙が示したものは、戦争に突進するとともに、戦争に国力の一切を集中するため増税や物価高騰で人々を生活苦にたたき込んでいる自公連立への根底的な怒りだ。支配階級の政治危機の深さは、戦争と新自由主義に対して労働者階級の総反撃に立つ絶好機の到来を示している。だが議会内では、国民民主党や立憲民主党や維新、さらには日本共産党が中国への排外主義をあおり、戦争翼賛に転落している。それが石破政権の存続を支えているのだ。この我慢ならない現実を生み出した最大の元凶は、一切の闘いを放棄し、戦時経済化による「賃上げ」さえ容認する連合の裏切りだ。

11・３集会は、沖縄・琉球弧を地獄の戦場とする中国侵略戦争を絶対に阻止するために新たな安保・沖縄闘争をつくり出すとともに、集会を呼びかけた３労組への組織破壊攻撃を粉砕し、戦争反対の砦として階級的労働運動をよみがえらせる固い決意を共有した。

集会後のデモは国家権力や右翼の妨害をはねのけ、中国侵略戦争阻止の声を都心にとどろかせた。

基調報告

動労千葉
関道利　委員長

先週の衆院選では自民党が大敗しました。特に安倍派は大きく議席を減らし、安倍一強の政治構造は最後的に終わりました。自公は比例区の票も激減させ、どちらも過去最少の得票です。大敗したのは自民だけではありません。維新も自民の次に得票を激減させ、共産党も公明に次ぐ減少です。議席をもっとも増やした立憲は、比例区の得票はほぼ増えていません。比例票で国民民主が維新を抜き、れいわは共産を抜いています。政治構造は大きく変化し、流動化しています。

現れたのは、今の政治への根本的な不信と怒りです。投票率は戦後３番目の低さで、半数近い人が投票自体をボイコットしました。投票結果だけ見ても、これまでの政治構造全体に NO の声が上がっています。底に流れているのは、社会にたいする積もりに積もった怒りです。新自由主義は、社会的な連帯や団結を解体し、労働組合を攻撃し、労働者の権利を奪い、生活を破壊してきました。それは医療や教育をはじめ、社会の底が抜けるような崩壊にまで行き着いています。

岸田政権下で安保三文書改訂から、大軍拡と敵基地攻撃能力保有、軍需経済へ舵を切り、ヒロシマの名で核を正当化するＧ７サミットを強行し、原発の最大限活用を国の責務とする法改悪に踏み込みました。沖縄・南西諸島には自衛隊の基地がつくられ、長距離ミサイルが配備され、ミサイル基地化・軍事拠点化が急速にすすめられています。今年４月の日米首脳会談以降、実際に中国を敵国として戦争を遂行するために、米軍との一体化を次々に具体化し、核抑止まで打ち出しました。戦争への怒り、新自由主義への怒り、溜まりに溜まっていた怒りが政治の流動化を生み出しています。

自民党のなかでさえバラバラで、さらに右翼的な部分が参政党や保守党に分かれています。石破は首相になって早々まともに多数派をつくることもできない状況に追い込まれています。支配階級の政治支配の危機です。つまりわたしたち労働者階級にとっては、闘いを前進させる絶好のチャンスです。

日本だけではありません。資本主義の総本山であるアメリカも、国内支配さえグラグラです。イスラエルに虐殺をおこなわせ続けるバイデンやハリスに怒りが爆発し、人生をかけたデモやスト、座り込みの闘いが叩きつけられています。続々とストが闘われ、大幅賃上げを勝ち取っています。労働組合の腐敗した指導部を、現場労働者の闘いがグラグラと揺さぶり、労働運動の歴史的な再生の展望が開かれています。

今回の選挙では、本当に重要なことは焦点にされませんでした。「国を守れ」という愛国主義と排外主義のもと、戦争に突き進んでいく攻撃との対決こそ、本来の最大の争点です。「中国が脅威だ」と大宣伝されていますが、２日前までおこなわれていた対中国の大軍事演習「キーン・ソード」は、４万５千人の日米軍とオーストラリア、カナダの４カ国に加えて、韓国や NATO 諸国などを引き連れ、そのまま対中国戦争に突入できるような一大演習でした。アメリカであり日本の側から圧倒的な軍事力で中国をうち破ろうという侵略戦争を仕掛けているのが現実です。東アジアから始まろうとする世界戦争・核戦争を絶対に阻止しなければなりません。

そのカギは日本の闘いが握っています。アメリカも日本の全面的な参戦抜きにこの侵略戦争をやりきることができないからです。なにより日米同盟最大の実体である沖縄米軍基地を撤去し、辺野古新基地建設と琉球弧のミサイル基地化を許さない、新たな安保・沖縄闘争の爆発をつくり出さなければなりません。

日本から巨大な反戦闘争をつくり出そうという決意で、全国の仲間たちが数十波もの反戦デモを闘ってきました。沖縄では土砂搬入を実力で阻止し、広島で平和公園の封鎖を打ち破って原爆ドーム前の集会を断固やりぬき、10.7 にはパレスチナ人民に連帯しイスラエル大使館へ実力で抗議する闘いに立ちあがってきました。新たな仲間たちとともに、こうした実力の闘いをやり抜き、闘いの新しい展望を切り開いてきました。石破は「改憲をやって国防軍をつくる」とか「アジア版 NATO が必要だ」とか主張している人物です。自民党の幹事長時代には、沖縄の自民党議員に公約をつくり変えさせて辺野古基地建設を飲ませた張本人でもあります。わたしたちの手で石破を打倒し、世界戦争・核戦争を絶対に阻止しましょう！

だからこそ問われているのは労働運動の変革です。

戦争に動員されるのが労働者なら、戦争を止める力があるのも労働者です。しかし日本の最大の労働組合のナショナルセンターである連合は、排外主義に加担し、中国への侵略戦争も推進する勢力になっています。労働組合は、団結と権利の拠り所であるとともに、反戦の砦であります。自国政府の戦争政策と闘い、労働者同士が殺しあうのではなく国境を越えて団結し、絶対に戦争を阻止することは、労働組合のもっとも重要な任務であります。ところが連合は、自国の軍拡や軍事演習などの戦争行為にたいして反対と言わず、闘いを組織しようとしません。それは日本の労働者の意識に大きく影響を及ぼしています。

連合を組織的な基盤にしている政党が立憲と国民民主ですが、どちらもあくまで日米同盟基軸で、これを強化すると言っています。立憲の代表・野田は石破と考えがよく似てると言われ、追い詰められた石破に手を貸しているのが国民民主です。連合会長の芳野は「ストの多いアメリカと違って日本は労使一体で企業を発展させる」「企業が発展しなければ労働条件は改善しない」などと語っています。しかも政府と財界が一体になって軍需産業を「防衛力そのもの」と言って莫大なカネが投じられる情勢です。「企業を発展させて賃上げを」とだけ言えば、戦争への加担、労働者を戦争へ動員していくことと同じです。

労働者、労働組合はこれでいいのか。労働者と資本家は水と油の関係です。そして社会の主人公は労働者です。わたしたちの手で、連合を乗り越える労働運動、階級的労働運動をつくりあげていくことが絶対に必要です。

最後に、本集会の呼びかけ三労組にたいする攻撃を、全労働者の未来のかかった闘いとして絶対に粉砕しようと訴えたい。関西生コン支部には、当たり前の労働運動を犯罪にでっち上げ、次々に逮捕・起訴していくという戦後最大の労組弾圧がかけられています。港合同には、民事再生を利用した役員の選別解雇、労働組合つぶしの攻撃がかけられています。そしてわたしたちの職場の JR では、労働法制の歴史的な改悪、全労働者への攻撃のモデルとして「労組なき社会」化攻撃がかけられています。関生支部は画期的な産業別労働運動をつくり出し、港合同は倒産攻撃に打ち勝ってきた労働組合だからこその攻撃です。こんな闘いはもう許さないという国策との対決、戦時下の労働組合つぶしとの対決であります。これは「戦争を止め、社会を変える」大きな闘いです。

すべての仲間の力を結集して、この闘いにかならず勝利しなければなりません。そして絶対に戦争を阻止するために、街頭で実力で闘い、職場からストライキを組織し、階級的労働運動をなんとしても再生させましょう。本日はその闘いの新しい出発にしたい。ともに闘いましょう。

反戦闘争の訴え

８・６ヒロシマ大行動

宮原亮　事務局長

２月２８日暴処法弾圧での５名の逮捕、そして広島市による「集会禁止命令」に対して、わたしたちはガザ虐殺を弾劾し、中国侵略戦争＝核戦争を許さない闘いとして、原爆ドーム前の反戦反核集会、そして岸田やイスラエルの代表、米大使の出席を弾劾するデモを貫徹しました。全国各地から、逮捕覚悟で１０００名近い結集によって実現した勝利です。本年８月６日は２つの意味においてターニングポイントとなりました。

ひとつは、日本帝国主義がついに核戦争をやること決断した。これを許すのか阻止するのかをめぐる歴史的激突の開始であったということです。７月の２プラス２で拡大抑止協議を閣僚級に格上げし、年末に共同文書を出すと発表した瞬間、９月の自民党総裁選ではすべての候補者から「非核３原則の撤廃」などの核武装と核戦争を志向する激しい衝動が吹き出しました。首相となった石破は公然と核共有を宣言し「核抑止というものは確かにある」などといって被爆者の核兵器絶対反対の闘いに敵対しています。

日本帝国主義が中国侵略戦争を決断し、それを核戦争としてやることを決断したから、そのために階級的労働組合を叩きつぶし、沖縄の闘いに襲いかかり、ヒロシマ・ナガサキを黙らせようとした。暴処法弾圧５名が逮捕以来８ヶ月が経過しても一度の裁判も開かれず、エアコンの無い拘置所に拘束され続けるという前代未聞の事態は、反戦闘争を暴力的に圧殺しようとする敵の意志をハッキリと示しています。

しかし、今年の８・６は今ひとつのターニングポイントとなりました。不当逮捕と集会禁止、この弾圧を

許したら戦争になる。だから一歩も引くことはできないという闘いに対して警察権力は指一本触れることもできなかった。逮捕を覚悟し、腹を括って闘えば勝てる！　このことがハッキリした。

以来、日本階級闘争には大きな化学変化が起きました。横須賀で、イスラエル大使館前で、横田で、全国で激しく実力闘争が爆発している。１０月８日と３０日の８・６暴処法弾圧における公判前整理手続きにおいても、広島地裁の前でも中でも警察権力と激突して闘いました。闘いの度に新たな仲間が結集しています。一歩も引かないと始まった闘いは一歩二歩と前に進み敵を押しています。

帝国主義者たちは、ノーベル平和賞を被団協に与えて被爆者の取り込みに必死ですけど、こんなものでヒロシマ・ナガサキの闘いが潰せると思ったら大間違いです。衆院解散・総選挙を見れば明らかです。

今日ここに集まった我々だけが、今中国侵略戦争阻止を掲げ、人民を結集しうる責任勢力です。８・６闘争だって、私たちが腹を括って一歩も引かないと決断しなかったら、ああいう闘争にはならなかった。どこかの誰かがやってくれるということはありません。

核戦争を阻止できるか、我々の肩にかかっています。絶対に負けるわけにはいきません。仲間を増やし、言葉を研ぎすまし、今日を起点に全国で反戦闘争をさらに爆発させましょう。来年は被爆８０年。広島は来年もその先頭で闘います！　ヒロシマ・ファイブを全国の力で一日も早く奪還しようではありませんか！

決意と報告

全学連
矢嶋尋　委員長

選挙のさなか自民党本部に火炎瓶が投げ込まれるという事件が起きました。この３年選挙のたびに、安倍や岸田にたいし、連続的に銃弾や爆弾が投げ込まれています。これらを見た多くの人々が「これくらいのことは起きて当然だ」と言っています。

その一方で与野党は口をそろえて「民主主義が暴力に屈してはならない」なんて言っていますが、日本政府こそがガザ虐殺を支えて、ミャンマー軍を支援して、そして反戦運動や労働組合を圧殺して、沖縄・南西諸島をミサイル基地にして、中国侵略戦争に突き進んでいる「暴力」そのものじゃないですか。こいつらの言う「民主主義」なんてものは、今すぐにでも破壊しなければなりません。腐り果てた政治、生活破壊、そして戦争にたいする煮えたぎる怒りは地に満ちています。この怒りをひとりの行動ではなく、数千数万の団結した行動として、階級的労働運動の旗のもとにひとつの力にまとめあげていきましょう！

この約３年あまり、わたしたちは大衆的実力闘争をよみがえらせることに力を入れてきました。今年の５月沖縄・辺野古で土砂搬入を座りこみで阻止しました。そして８月６日のヒロシマでは、広島市当局と機動隊による「集会禁止」を徹夜の座り込みで粉砕して、原爆ドーム前での集会を実力で勝ち取りました。この実力の闘いのなかで、新入生をはじめとした新たな仲間が次々と人生をかけて合流してきてくれています。今年９月の全学連大会では、この３年あまりで運動に加わった仲間を中心として、新執行部を確立しました。

わたしたちは赤嶺前委員長のもとで切り開いてきた安保・沖縄闘争の地平をまっすぐに引き継いで、中国侵略戦争阻止の反戦闘争を 70 年闘争をこえる規模でつくり出す決意です。

この新体制のもとで、10.7 パレスチナ蜂起１ヵ年闘争、横須賀をはじめとする反基地闘争を、全国で、機動隊と激突する内乱的な闘いとして、波状的に打ちぬいています。国家や警察は万能ではありません。社会の 99％であるわたしたち労働者・学生・民衆が団結すればかならず戦争を止めることができます。

私たち青年世代にとって、戦争を止めて資本主義を終わらせない限り、人生や未来に一切の希望はありません。今日この場には、そのことを確信した仲間たちが昨年よりもずっと多く参加しています。全学連は、この隊列をさらに拡大させ、最後の勝利まで最先頭で闘います。今の野党に代わる、すべての労働者・民衆の新しい選択肢として、わたしたちの力を復権させていかなければなりません。

ここに集まったみなさんに呼びかけます。今こそ中国侵略戦争を阻止する新たな安保・沖縄闘争を、首都東京に巨大につくり出しましょう！　社会を変える主体として、ともに闘いましょう！